



筑紫女学園大学リポジット

A Study of the Term Kautukamaṅgala

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楠本, 信道, KUSUMOTO, Nobumichi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/447

kautukamaṅgala 研究

楠 本 信 道

A Study of the Term *kautukamaṅgala*

Nobumichi KUSUMOTO

【1 問題の所在】

親鸞は『顯淨土方便化身土文類』「化身土卷末」の外教釈引用において、次のように言及する。その原文、書き下し、及び和訳を以下に示そう。

又言離於占相修習正見決定深信罪福因縁抄出（聖典全二・二三九）（また言はく、占相を離れて正見を修習せしめ、決定して深く罪福の因縁を信ずべし、と。抄出。）

また、[次のように]説かれている。「占相を離れて、正見を修習せしめ、罪・福の因縁を決定して深信すべきである」と。抄出。

ここに親鸞が引用しているのは、『華嚴經』「十地品」（佛馱跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經』T. 278, 以下『六十華嚴』）の言及である¹。まず、この引用において、「占相」という言葉が見られ、さらに、「正見」・「決定深信」・「因縁」という言葉も言及されている。これらはそれぞれ仏教語としても非常に重要であるが、これらのうち、「占相」という訳語の原語は、一体何であろうか。詳細については後述するが、先に見た『六十華嚴』「十地品」の原典と見做される *Daśabhūmikāsūtra*（以下、Dbh, 『十地經』）には、「kautukamaṅgala」という梵語が見られ、これが「占相」という漢訳に対応する。

「占相」という漢訳からも推察されるように、この「kautukamaṅgala」という術語は、「占い」や「迷信」といった概念を示す語であろうことが容易に予想される、だが、この術語は、具体的にはどのような意味を持つのであろうか。また、親鸞が「占い」や「迷信」を否定したことは周知の事実であるが、そもそも仏教史の始まりにおいて、釈尊自身が「占い」や「迷信」を否定したとい

うことも非常によく知られている²。だが、この‘kautukamaṅgala’ という語に示される概念は、仏教文献において具体的にどのように説明され、そしてまたその行為はどのような理由で否定されてきたのであろうか。この問題を明らかにするために、本稿では‘kautukamaṅgala’ という語について考察していくことにする。

なお、‘kautukamaṅgala’ という語は、基本的には、並列複合語 (dvandva) と考えられるため、本稿では、‘kautuka’ と ‘maṅgala’ とを区別するために、「吉兆 (kautuka)」、 「吉祥 (maṅgala)」 と訳すことにするが、「吉兆」及び「吉祥」という訳語は、両者を単に区別するために用いているだけであり、これらの訳語が常に ‘kautuka’ 及び ‘maṅgala’ という語の意味を常に的確に表現しているわけではない、ということをお断りしておく。

【2 *Daśabhūmikasūtra* における kautukamaṅgala】

以下、Dbh に関連する経典や論書に言及される ‘kautukamaṅgala’ について考察していく。まず、先に言及した『六十華嚴』 「十地品」と、その原典と思われる Dbh の言及を以下に挙げよう。

『六十華嚴』 T. 278, 9, 549a08: 離於占相。習行正見。決定深信罪福因縁。離於諂曲。誠信三寶。生決定心³。(占相を離れて、正見を習行し、罪福の因縁を決定して深く信じ、へつらい(諂曲)を離れて、三宝を誠信し決定心を生ずる。)

Dbh Ko p.40, // 1-3; Rah p.25, // 8-11: samyagdr̥ṣṭiḥ khalu punar bhavati / samyakpathānugataḥ⁴ kautukamaṅgalanānāprakāra kuśīladr̥ṣṭivigataḥ / r̥judr̥ṣṭiḥ aśaṭho ‘māyāvī buddhadharmasamghanīyatāśayaḥ’⁵

また実に、正見がある。[すなわち、正見とは] 正しい道に従い (samyakpathānugata)⁶、様々な種類の吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala)、そして悪戒 (kuśīla) に関する見解を離れることである⁷。正直な見解 (r̥judr̥ṣṭi) であり、へつらうことなく (aśaṭha, 無諂)、騙すことない (amāyāvin, 無誑)、仏・法・僧に対する確定された意向 (niyatāśaya) である。

漢訳と梵語原典とで相違はあるが、部分的に対応しそうな言及に注目すると、『六十華嚴』の「占相」は ‘kautukamaṅgala’ に対応し、「習行正見」⁸の「正見」は ‘samyagdr̥ṣṭi’ あるいは ‘samyakpatha’ に対応していることがわかる。「決定深信」は ‘niyatāśaya’⁹ にほぼ対応すると思われるが、正確に言えば、「決定深信罪福因縁」という漢訳に直接対応する梵語は存在せず、特に「罪福因縁」という言葉は漢訳者による意識である。その後で、漢訳者は ‘buddhadharmasamghanīyatāśaya’ を、「誠信三寶。生決定心」と訳しているので、‘niyatāśayaḥ’ を「誠信……生決定心」という形で再度訳していることがわかる。また、‘kuśīladr̥ṣṭi’ (悪戒に関する見解) については、対応する漢訳が欠けるが、この ‘kuśīladr̥ṣṭi’ は ‘kautukamaṅgala’ と並列される概念であり、「正見」と対立する概念と言える。そして、「正見」は、「正直な見解 (r̥judr̥ṣṭi)」、 「へつらうことなく (aśaṭha, 無諂)」、 「騙すことない (amāyāvin, 無誑)」、 「仏・法・僧に対する確定された意向 (niyatāśaya)」

と言い換えられている。このように漢訳と梵語とが完全に対応するわけではないが、ともかく、「占相」という漢訳の原語となっているのは、'kautukamaṅgala' という梵語であることが両者の比較により確認できる。

【2.1 Āryadaśabhūmivyākhyāna における kautukamaṅgala】

さて、Dbh の言及は、註釈ではどのように説明されているのだろうか。まず、Vasubandhu (ca. 400, 世親) による Dbh の註釈 *Āryadaśabhūmivyākhyāna (以下、DbhV) を見てみよう。

正見 (samyagr̥ṣṭi) は、七種の見解の対治 (*pratipakṣa) として説示されるのであって、七種の見解〔の対治のうち〕¹⁰、かの(1)「別の乗 (*yāna) に関する見解」の対治 (*pratipakṣa) として、「正しい道に従い (samyakpathānugata)」と〔世尊は〕お説きになられているのである。

(2)「勝れていない構想 (*parikalpa) に関する見解」と(3)「戒 (*śīla) のみによる清浄に関する見解」、それ〔ら〕の対治 (*pratipakṣa) として、「様々な種類の吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala), そして悪戒 (kuśīla) に関する見解を離れること」と〔世尊は〕お説きになられているのである。

それ〔ら二つ〕のうち、(3)「戒 (*śīla) のみによる清浄に関する見解」は、我見取に関する戒 (*ātmadr̥ṣṭiparāmarśaśīla) であると知られるべきである。

かの(4)「我れに執著する見解 (*ātmaparāmarśadr̥ṣṭi)」の対治 (*pratipakṣa) として、「正直な見解 (r̥judr̥ṣṭi)」と〔世尊は〕お説きになられているのである。

(5)「覆 (*mrakṣa) に関する見解」と、(6)「非真実 (*anṛta) に関する見解」、それ〔ら〕の対治 (*pratipakṣa) として、「へつらいがない (aśaṭha, 無諂), 騙すことがない (amāyāvin, 無誑)」と〔世尊は〕お説きになられているのである。

かの(7)「世間の人々の汚れた (*āsuddha) 見解」の対治 (*pratipakṣa) として、「仏・法・僧に対する確定された意向 (niyatāśaya) である」と〔世尊は〕お説きになられているのである¹¹。

ここで「七種の見解」、言い換えれば「七つの誤った見方」が問題になっており、さらに、「正見 (samyagr̥ṣṭi)」が「七種の見解の対治」となることが明確に示されている。以下に、〈七種の見解の対治となるもの〉と〈七種の見解〉を整理しておこう。

〈七種の見解の対治となるもの〉	〈七種の見解〉 (Vasubandhu の解説)
[1] 「正しい道に従い(samyakpathānugata)」……	(1) 「別の乗 (*yāna) に関する見解」
[2] 「吉兆(kautuka)と吉祥(maṅgala)に関 する見解を離れること」	(2) 「勝れていない構想(*parikalpa)に関する見解」 吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala)
[3] 「悪戒(kuśīla)に関する見解を 離れること」	(3) 「戒 (*śīla) のみによる清浄に関する見解」 我見取に関する戒 (*ātmadr̥ṣṭiparāmarśaśīla)

- [4] 「正直な見解 (tjudrṣṭi)」 …………… (4) 「我れに執著する見解 (*ātmaparāmarśadrṣṭi)」
- [5] 「へつらいがない (aśaṭha, 無諂)」 …………… (5) 「覆 (*mrakṣa) に関する見解」
- [6] 「騙すことがない (amāyāvin, 無誑)」 …………… (6) 「非真実 (*anṛta) に関する見解」
- [7] 「仏・法・僧に対する確定された …………… (7) 「世間の人々の汚れた (*aśuddha) 見解」
意向 (niyatāśaya)」

問題となっている ‘kautukamaṅgala’ について、Vasubandhu は「勝れていない構想 (*parikalpa) に関する見解」と言い換えているが詳細な説明はない。なお、DbhV の漢訳である菩提流支訳『十地經論』(T. 1522) を見ると¹²、この「勝れていない構想 (*parikalpa) に関する見解」というのは、「虚妄分別見」と訳されている。さらに、‘kautukamaṅgala’ は「占相吉凶」と訳されており、‘kautuka’ と ‘maṅgala’ とがそれぞれ個別の概念として示され、「並列複合語」で解釈されていることがわかる。

ところで、この ‘kautukamaṅgala’ がなぜ「虚妄分別見」なのか。これについて、法上の『十地論義疏卷第一・第二』(以下、『十地論義疏』T. 2799) は次のように説明する。

(2)虚妄 [分別見] は、生死をもって生死となし、涅槃をもって涅槃となすのであって、涅槃と生死 (悟りと迷い) とを無二 (同じもの) と [見ることが] できない [見] である¹³。

法上は「涅槃と生死」(悟りと迷い) を、別々のものと見て、それらを同じものと見ないことが、「虚妄」であると説明していることがわかる。いわば、生に執著し死を恐れ、「生死の迷いの世界」と「涅槃という悟りの世界」とを別々に見ようとする人間の考え方が「虚妄」なのだ、と法上は説明していると考えられる。

さらに、「虚妄分別見」について、澄觀の『大方廣佛華嚴經疏』(以下、『華嚴經疏』T. 1735) では次のように説明される。

二には、[正道に住する者は] 占トを行わず、妄分別見という、すなわちこの邪見を治す。そもそも吉凶や惜しむこと (悔吝) は、愛と憎しみ (愛悪) によって生ずるのであって、したがって、虚妄と呼ぶのである¹⁴。

澄觀は「吉凶や惜しむこと (悔吝) は、愛と憎しみ (愛悪) によって生ずる」から「虚妄」なのだと説明していることがわかる。澄觀の考え方は、「愛から取 (=四取：欲取・見取・戒禁取・我語取) が生ずる」(tṛṣṇā→upādāna) という原始仏教やアビダルマ仏教における十二支縁起の説明にも通じる考え方と言える¹⁵。つまり ‘tṛṣṇā’ によって何らかの「見」が生ずるのだが、その「見」の中に ‘kautukamaṅgala’ も含まれる、ということになると考える¹⁶。

以上の法上と澄觀の説明を考慮しつつ解釈すると、およそ次のようになるかもしれない。愛と

憎しみを原因として、吉凶や惜しむことを行ってしまうのが人間なのであるが、そういった形で生存に執著し死を恐れるという人間の考え方が「虚妄」なのであり、一方、生死と涅槃とを分けずに同じものとする考え方が「虚妄ではない」ということになるのであって、それらのうち、前者と関係してくる考え方が、‘kautukamaṅgala’である、ということになる。

ところで、Dbh の最も古い漢訳として、竺法護『漸備一切智徳経』（以下、『漸備一切』T. 285）を挙げることができるが、興味深い説明がなされているので見ておこう。

また、(1)邪見を棄て、正見を大事にして、仏教以外の教え（外學）に堕しない。(2)貪りの対象（*kautuka, 貪事）や虚偽の術（*maṅgala, 虚偽之術）や日柄のよい日（吉良之日）を捨て、時節について選ばず（不擇）、天子の位（國位）を思議せず、もし、帝主を見て、[彼を] もって貴いとなさず、(5)へつらい（諛諂）を抱かないならば、心の表と裏が一致（相應）し、心性が仁和である。(7)仏法僧（佛法衆）を大事にして三寶を失わない¹⁷。

ここで言及される項目を、上述した DbhV の「七種の見解」に当てはめようとする、(3) (4) (6) が対応しない¹⁸。また、‘kautukamaṅgala’に対応すると考える項目は、「(2)貪りの対象（*kautuka, 貪事）や虚偽の術（*maṅgala, 虚偽之術）」であるが、その後の「日柄のよい日（吉良之日）を捨て、時節について選ばず（不擇）」という項目も、‘kautukamaṅgala’ と無関係ではなさそうである。

これら「日柄のよい日」や「時節」を選ぶことは、「見」（dṛṣṭi）に含まれるが、‘kautukamaṅgala’には含まれるのであろうか。論書によって‘kautukamaṅgala’の定義は違っているので、その詳細については後述したい。

ところで、‘kautukamaṅgala’についての説明は、DbhV の註釈である、Sūryasiddhi による *Daśabhūmivyākhyānavyākhyāna（以下、DbhVV）では省略されているため¹⁹、別の諸文献によって、‘kautukamaṅgala’の定義について考えていきたい。

【2.2 Madhyamakāvatārabhāṣya 及び Madhyamakāvatāraṭīkā における kautukamaṅgala】

以下は *Madhyamakāvatārabhāṣya*（以下、MAvBh, 『入中論註』）に引用される Dbh の言及である。

邪見（*mithyādṛṣṭi）を断つこともである。[すなわち] 正しく見ていて、[1]正しい道に従い（*samyakpathānugata）、[2]様々な種類の吉兆（*kautuka）と吉祥（*maṅgala）、そして[3]悪戒（*kuṣīla）に関する見解を離れることである。[4]正直な見解（*rjūdṛṣṭi）であり、[5]へつらいがない（*aśaṭha, 無諂）、[6]騙すことがない（*amāyāvin, 無誑）から、[7]仏・法・僧に対する確定された意向（niyatāśaya）である」云々と「世尊が」お説きになられているように²⁰。

ここに引用される Dbh は、DbhV に引用されるものとはほぼ同じであり、〈七種の見解の対治となるもの〉がほぼそのままの形で述べられていることがわかる。

さて、問題の‘kautukamaṅgala’はどのように説明されているのか。Jayānandaの*Madhyamakāvataṛaṭikā*（以下、MAvT, 『入中論疏』）の言及について見よう。

「[1]正しい道に従い(*samyakpathānugata)」という[Dbh]は、まさに正見(samyagrṣṭi)が善趣(*sugati)の道であるから、正しい道(*samyakpatha)であって、それに従っている(*anugata)のである。

「(2)吉兆(*kautuka)」という[Dbh]は、算術家(*gāṇitika)²¹たちのものであり、それによって未来を把握する(*parijñāna)からである。

「(2)吉祥(*maṅgala)」という[Dbh]は、道(旅)に入る等[の時に]吉相を見ることである。

「様々な種類の[3]悪戒(*kuṣṭila)に関する見解を離れることである」という[Dbh]は、異教徒(*tīrthika)の論書(*śāstra)における、様々な種類の説示に関する見解であり²²、それを離れることである。

「[4]正直な見解(*rjdrṣṭi)」と説かれた[Dbh]は、「[5]へつらいがない(*aśatha, 無諂)、[6]騙すことがない(*amāyāvin, 無誑)」と述べられているのであって、それ[ら]のうち、(5)「へつらい(*śatha, 諂)」は、利益や名誉(*lābhasatkāra)に捉われ、欲望・瞋り・無知の区分(*kāṇḍa)を具えたままに、自分の功德をありのままに示さず、正しい教授(*avavāda)を与えることを妨げることである。それを離れることが[5]「へつらいがない(aśatha, 無諂)」である。

(6)「騙すこと(*māyāvin, 誑)」は、利益や名誉(*lābhasatkāra)に捉われ、欲望・瞋り・無知の区分(*kāṇḍa)を具えた、非真実な功德(*guṇa)を表示する、誤った生活(*mithyājīva)に所依をもたらず働きをもつものである。

[7]「確定された意向(niyatāśaya)」という[Dbh]は、三宝が存在すること等に対して確定して見ることである²³。

まず、「吉兆(*kautuka)は、「算術家(*gāṇitika)たちのものであり、それによって未来を把握する(*parijñāna)」ものであって、「吉祥(*maṅgala)は、「道(旅)に入る等[の時に]吉相を見ること」と定義されていることがわかる。つまり、この説明から、「吉兆(*kautuka)は「未来を把握、占うもの」であって、「吉祥(*maṅgala)は、旅に出るときか何かに「めでたいものを見ること」であることがわかる。

‘kautukamaṅgala’以外の項目について本稿では深く立ち入らないが、Jayānandaの解説がVasubandhuやSūryasiddhiの解説とかなり異なることは注意されるべきなので²⁴、以下図示しておく。

〈七種の見解の対治となるもの〉 〈七種の見解〉(Jayānandaの解説)

[1]「正しい道に従い(samyakpathānugata)」…(1) none

「善趣(*sugati)の道」

- [2] 「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) に関 …… (2) 吉兆 (kautuka)
 する見解を離れること」 算術家 (*gāṇitika) たちのもの、未来を把握する
 (2) 吉祥 (maṅgala)
 道(旅)に入る等 [の時に] 吉相を見ること
- [3] 「悪戒 (kuśīla) に関する見解を …… (3) 異教徒の論書における様々な種類の説示
 離れること」
- [4] 「正直な見解 (rjudrṣṭi)」 …… (4)
- [4']=[5] 「へつらいがない (aśaṭha, 無諂)」 …… (4')=(5) 「へつらい (*śaṭha, 諂)」
 正しい教授 (*avavāda) を与えることを妨げる
- [4'']=[6] 「騙すことがない (amāyāvin, 無誑)」 …… (4'')=(6) 「騙すこと (*māyāvin, 誑)」
 非真実な功德 (*guṇa) を表示する、
 誤った生活 (*mithyājīva) に所依をもたらす
- [7] 「仏・法・僧に対する確定された …… (7) 「三宝が存在すること等に対して確定して見
 意向 (niyatāśaya)」 [ないこと]

以上のように、Jayānanda は MAVT において、Vasubandhu と同じような「七種の見解」という解釈を採用しながらも、Vasubandhu とは明らかに別様の解釈を与えている。

なお、'kautukamaṅgala' について、DbhV や DbhVV で具体的な説明がなされないのは、この語が、ある意味インド文化圏では常識的に捉えられる概念であるから説明するまでもないと、Vasubandhu や Sūryasiddhi によって捉えられていたことを意味するのかもしれない。だが、MAVT によってようやく 'kautuka' と 'maṅgala' との違いが、おぼろげながら見えてきた。

【3 Yogācārabhūmi における kautukamaṅgala】

さて、Dbh に関連する議論における 'kautukamaṅgala' について見てきたわけだが、'kautukamaṅgala' とは、具体的にはどのような意味なのかを他の文献を使ってもう少し探っていきたい。

【3.1 Yogācārabhūmi 本事分における kautukamaṅgala】

梵語で明確に説明している文献としては、Yogācārabhūmi (以下、YBh) 本事分を挙げることができる。YBh では「十六の異論」(ṣoḍaśa paravādāḥ) が問題となるが、その十六のうちの最後に掲げられるのが 'kautukamaṅgalavāda' ([妄計] 吉祥論) である。以下はその議論である。

「(16) [妄計] 吉祥論 (kautukamaṅgalavāda, 吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) 論)」とは何か。さらに例えばここで、ある沙門あるいは婆羅門が、次のように見て、次のような主張を持っているので

ある。日・月・食 (graha) ・[ナクシャトラ (*nakṣatra)²⁵・] 太陰日 (tithi) の不一致によって、諸々の願い事 (manoratha) が成就しないのである。一方、それ [ら] の一致によって、[諸々の] 願い事 (manoratha) が成就するのである [と考えて]。彼 [ら]²⁶はそのために、日等に対する供養を考案し、供物を投じて捧げること (homa) ・誦すること (jāpa) ・草を散布すること (darbha)²⁷ ・[酒や水で] 満たされた瓶 (pūrṇakumbha) ・頻螺の果実・ほら貝等を礼拝させる (pratyupasthāpayati)²⁸。例えば、算術家 (gāṇitika) たち [がなす] ように²⁹。

「日・月・食」云々の不一致によって願い事は成就せず、それらが一致することによって願い事が成就する、ということが述べられている。そして、日等に対する供養についても述べられ、供物を投じて捧げること (homa) ・誦すること (jāpa) などといった、儀式の詳細についても述べられている。そして、MAvT で見られたように、「算術家」(gāṇitika) という語が見られる。ただし、YBh の 'kautukamaṅgalavāda' の言及において、'kautuka' と 'maṅgala' とは、「並列複合語」としては明確に区別されないまま説明されていることがわかる。

ところで、「kautukamaṅgala' に「日柄のよい日」や「時節」を含めるべきかどうかという問題についてだが、この YBh の言及だけを根拠とすれば、「日・月・食 (graha) ・[ナクシャトラ (*nakṣatra) ・] 太陰日 (tithi)」という言及が見受けられるから、上述した『漸備一切』における「日柄のよい日」や「時節」というようなものは、'kautukamaṅgala' に含まれる、あるいは 'kautukamaṅgala' と非常に近接した概念のようである³⁰。

【3.2 Bodhisattvabhūmi 及び Bodhisattvabhūmivākyā における kautukamaṅgala】

ところで、*Bodhisattvabhūmi* (以下、BBh) では、「殺生による布施」と 'kautukamaṅgala' の関係について言及があるので見ておく。

また、誤った見解 (asaddṛṣṭi) と結びついた布施を与えるということはない。

例えば、³¹大なる恐ろしい祭式 (mahāraudrayajña, 廣大暴悪祠祀) において、殺生による布施を以て、法 [となること] は把握されない。また、吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と結びついている布施を与えることも [法となることは把握され] ないし、また、極めて清浄なる、あらゆる種類の単なる布施を以ても、世間と出世間の離欲清浄 (vairāgyaviśuddhi) [となること] も把握されない³²。

「殺生による布施を以て、法 [となること] は把握されない」ことと、「吉祥 (maṅgala) と結びついている布施を与えることも [法となることは把握され] ない」ことが言及される。これらのことは、BBh では別々の事柄として、説明されているのだが、BBh の註釈 *Bodhisattvabhūmivākyā* (以下、BBhVy) では、これらが結びつけられて説明されているので、見てみよう。

「殺生による布施を以て」云々という [BBh] について、[六] 天衆 (*devanikāya) 等という吉兆 (*kautuka) と吉祥 (*maṅgala) と結びついていない (*apratisamyukta) としても、日 (*āditya) やナクシャトラ (*nakṣatra) 等という分別と結びついていることによって「殺生による布施を行ってしまうの」である。戒禁取見 (*śīlavrataparāmarśadrṣṭi) を前提とするものであるとしても、排除するするため、「また、極めて清浄なる」云々という [BBh] は、解脱に廻向するものであるとしても、という意味である³³。

BBhVy の解説により、「kautukamaṅgala」が「天衆」(おそらく六天衆) と結びつくものであることが説明されるが、両者がどのような関係にあるのかは不明である。ただ、おそらく、殺した動物等を天へ捧げることが関係しているものと考えられる。そう考えた場合、この BBhVy の解説は次のような意味になると思われる。

まず、「殺生による布施」というのは、殺した動物等を天へ捧げる「供犠」を意味しており、「kautukamaṅgala」と結びついた場合、そういった殺生による布施が行われてしまう。また、そのような「kautukamaṅgala」と結びついていなくても、日 (*āditya) やナクシャトラ (*nakṣatra) 等という分別と結びついていることによって、それらに合わせて、殺生による布施が行われてしまう。だが、そのような殺生による布施が「法となること」はない。それが、BBh 及び BBhVy に示されている内容ではないかと思われる。

さて、ここで「天衆」という言葉が出てきた。本稿で扱う文献のうち「kautukamaṅgala」を「天衆」と関連づけて説明するのは、この BBhVy の例のみであるが、BBh では「大なる恐ろしい祭式 (mahāraudrayajña)」という語が見られ、これは漢訳では「廣大暴悪祠祀」と訳されているから、おそらく、「殺生を行ってそれを天へ捧げる恐ろしい祭り」ということを意味しているのであろう。わかりやすく言えば、おそらく、インド文化において、「kautukamaṅgala」や「日 (*āditya) やナクシャトラ (*nakṣatra)」等の考え方によって、肉や魚を天へ捧げ物として用いることがあり、それが仏教徒によって批判されている、ということなのであろう。

なお、ここで注目すべきは、「kautukamaṅgala」が「日 (*āditya) やナクシャトラ (*nakṣatra)」とは異なるものとして説明されていることである。後者を前者に含めて考えるかどうかは、テキストによって違っていることは注意しておきたい。

また、「戒禁取見 (*śīlavrataparāmarśadrṣṭi)」という語が、BBhVy で言及されているから、やはり「kautukamaṅgala」が戒禁取見と関わりが深いことは、この言及からも明らかである。

【4 *Śālistambasūtra* における kautukamaṅgala】

次に、*Śālistambasūtra* (以下、*Śāli*) における「kautukamaṅgala」について見ておこう。

以下は *Prasannapadā* (以下、PrP) に引用される *Śāli* と、Vaidya本の *Śāli* (以下、*Śāli* (Vai)) と、*Nidānasamyukta* (以下、NS) 14、そしてさらに、PrPの蔵訳 (PrP(Tib)) を用いて reconstruct し

た Śāli の言及である³⁴.

PrP (a) p. 594, ll. 1-4; PrP (b) p. 259, ll. 3-6; Śāli (Vai) p. 106, ll. 20-24: yāny ekeṣāṃ śramaṇabrāhmaṇānām prthagloke dṛṣṭigatāni bhaviṣyanti, tadyathā ātmavādapratisaṃyuktāni sattvavādapratisaṃyuktāni³⁵ jīvavādapratisaṃyuktāni pudgalavādapratisaṃyuktāni³⁶ kautukamaṅgalavādapratisaṃyuktāni³⁷ unmiñjitāni nimiñjitāni ca³⁸, tāny asya tasmin samaye prahīṇāni bhavanti parijñātāni samucchinnamūlāni tālamastakavad anābhāsagatāni āyatyām anutpādānirodhadharmāni //³⁹

ある沙門や婆羅門たちにとって、様々な世界における「誤った」見解がある場合、例えば、(1) [有]我論と結びついているもの・(2)有情論と結びついているもの⁴⁰・(3)生命論と結びついているもの・(4)ブドガラ論と結びついているもの⁴¹・(5)吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) 論と結びついているもの・(6)開かれたものと閉じられたもの⁴²がある場合、それら [の諸論] は、彼 [ら] にとって、そのとき断ぜられ、遍知され、根こそぎにされ、ターラ樹の頂上のように、顕現していないものに属する、未来における無生無滅法 [となる]⁴³.

上述した BBhVy においては、‘mtshan dang bkra shis dang mi ldan du zin kyang’ (= prob. *kautukamaṅgala-apratisaṃyukte 'pi, 吉兆 (*kautuka) と吉祥 (*maṅgala) と結びついていない (*apratisaṃyukta) としても) という言及があったが、ここでは ‘kautukamaṅgalavādapratisaṃyukta’ という語が言及されている。そして、この Śāli に言及される「沙門や婆羅門たち」という語からもわかるように、‘kautukamaṅgala’ というのは、やはり仏教以外のインド思想にかかわるものであることが明らかである。

では、Śāli で言及される ‘kautukamaṅgalavādapratisaṃyukta’ (吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) 論と結びついているもの) とは具体的には何を意味するのか。Śāli の註釈に具体的な説明があるので見よう。

【4.1 Ārya-Śālistambaka(-nāma)mahāyānasūtraṭīkā における kautukamaṅgala】

以下、Śāli について二つの註釈を見ていくが、まず、*Ārya-Śālistambaka(-nāma)mahāyānasūtraṭīkā (以下、ŚSMT) について見ていく。

「吉兆 (*kautuka) と吉祥 (*maṅgala) [論 (*vāda)] と結びついている (*pratisaṃyukta)」⁴⁴ という [Śāli] について、吉兆 (*kautuka) とは、世間における技巧的な部門 (*śilpasthāna)、様々な種類の学術の部門 (*vidyāsthāna) [である.] すなわち、祝祭 (*utsava)、結婚すること (*āvāha)、妻を迎えること (*vivāha)、論争 (*kalaha)、戦い (*samgrāma)、遊園 (*udyāna)、河 (*nadī)・海 (*samudra)・山 (*parvata)・森 (*vana) [といった]、それぞれの別の聖なる [場所] へ行くこと、見ること、移動すること、活動すること、持続する勸喜の戯れという楽を享受する舞、歌 (*gīta)、話 (*pralāpa)、おしゃべり (*pralāpa)、跳ぶこと (*ullaṅghana)、場合、生じたもの (*utpanna)、女性 (*strī)、息

子 (*dāraka), 娘を送った話, 論 (*vāda), なぞを語ること, 象 (*nāga)・馬等を争うこと, 草を散布すること (*darbha), ヨーグルト (*dadhi), 牛黄 (*gorocanā), 田 [の] 鋤き (*lāṅgala), ハンマー (*mudgara), 花 (*puṣpa), 果実 (*phala), 瓶 (*kumbha), ほら貝 (*śaṅkha), 魚 (*matsya) 等, 婆羅門 (*brāhmaṇa), 牛王 (*ṛṣabha), 月 (*candra), 日 (*āditya), 食 (*graha), 星 (*jyotis), ナクシャトラ (*nakṣatra) と, 時間 (*muhūrta), 言葉の使用 (*prayoga), 手段 (*karaṇa) 等であって, 占星術者 (*naimittika) 等が, アートマン (*ātman) と幸運 (*śubha) を求めることと, 種々の顛倒したひもをつかみ, 「道でないもの」 (*amārga) に対して「道」 (*mārga) と考えて, 「不浄なもの」 (*asuddha) に対して「浄らかなもの」 (*suddha) と考えて, 「解脱でないもの」 (*amukta) に対して「解脱」 (*mukta) と考えることによって, 六つの生存形態 (*gati 趣) という車輪 (*cakra) に留まる知を持つ衆生と, 生存形態 (*gati 趣) に至る者たちは, まさに輪廻に従うのである. しかし, 「[それらは] 涅槃に [至るもの] ではない」と, このように正しい智慧によって見る場合には, 四種の顛倒 (四顛倒) を離れるから, 「根こそぎにされ」 (*samucchinamūlāni), それ [らの諸論] は [彼らにとって] 顕現しなくなり, 「断ぜられ」 (*prahīṇāni bhavanti) ているから, 「遍知され」 (*parijñātāni), 根こそぎにされ (*samucchinamūlāni), ターラ樹の頂上のように (*tālamastakavad), 顕現していないものに属する (*anābhāsagatāni), 未来における無生無滅法 [となる] (*āyatyām anutpādānirodhadharmāni) と [Śāliの中で] 言われているのである⁴⁵.

ŚSMT において, 「吉兆 (*kautuka) とは」 (dge mtshan ni) 云々と説明が始まるが, 「吉祥 (*maṅgala)」については全く説明がない. だが, 後述の註釈からも明らかのように, ŚSMT では, 「吉兆 (*kautuka)」という語に, 「吉祥 (*maṅgala)」の意味も含ませた上で, このように説明していると考えられる.

そして, この 'kautukamaṅgala' については, 「世間における技巧的な部門, 様々な種類の学術の部門」というようにまず説明され, その後, 実に様々な項目が挙げられている. BBhVy では「天衆」との関わりについて言及されていたが, 必ずしも, 祭りに限ったものではないことがこの ŚSMT より明らかである. ŚSMT の説明は詳細で多岐にわたるため, 'kautukamaṅgala' が一体何を意味するか, かえってわかりにくくなっているが, ここで語源的な意味から考えてみたい.

'kautuka' や 'kautūhala' という梵語は, 辞書的な意味としては, 「好奇心, 興味, 熱望」等を意味する. また, 'kotūhala' というパーリ語は「興奮」⁴⁶等を意味する. これらのことを考慮すれば, 'kautukamaṅgala' とは「世間の人々が好奇心を抱いたり, 興味を持ったり, 熱望したり, 興奮したりするような活動・関心事」であり, しかも, それが「仏教の寂靜の性格とは異なる活動・関心事」であることを示しているのではないかと思われる.

なお, ここで, 「日 (*āditya), ナクシャトラ (*nakṣatra) と, 時間 (*muhūrta)」という語が言及されるが, これらを 'kautukamaṅgala' に含ませるという意味では, YBh の言及と共通性があると言えよう. また, 「占星術者 (*naimittika)」という語は, MAVT や YBh に言及される「算

術家 (gāṇitika)」と非常に近い人々の存在を意味しているのではないかと考えられる。

なお、ŚSMT は、これらの考え方が「四顛倒」だと言及していることに注意しておきたい。

【4.2 Ārya-Śālistambakaṭīkā における kautukamaṅgala】

次に、*Ārya-Śālistambakaṭīkā (以下、ŚST) について見ていこう。

「吉兆 (*kautuka) と結びついている (*pratisamyukta)」という [Śāli] は、そのような形 (*tathārūpa), 物語 (*akhyāna), 古事 (*itihāsaka), 歌 (*gīta) [や] ダンス (*nāṭa) 等によって、アートマンが喜ぶと伝えられている、というように執著するからである。

「吉祥 (*maṅgala) 論 (*vāda) と結びついている (*pratisamyukta)」[という Śāli] は、草を散布すること (*darbha), 牛黄 (*gorocanā) 等に依存し、ヨーグルト (*dadhi), 花 (*puṣpa), [酒や水で] 満たされた瓶 (*pūrṇakumbha), 魚 (*matsya), 婆羅門 (*brāhmaṇa), 牛王 (*rṣabha) 等を見ること, 星 (*jyotis), 時間 (*muhūrta), 太陰日 (*tithi), 特殊な実行者によってアートマンが清浄になるであろう、と慢心する (*māna) のであって、彼らは「道でないもの」(*amārga) に対して「道」(*mārga) と執著する (*abhiniveśa) から、戒禁取見 (*śīlavrataparāmarśadrṣṭi) [を持つ者たち] であって、我執 (*ātmagrāha) が「根 (*mūla)」⁴⁷である。⁴⁸

ŚST において、「吉兆 (*kautuka)」とは、物語や古事などによって「アートマンが喜ぶ」と伝えられていると執著することである。一方、「吉祥 (*maṅgala)」とは、「草を散布すること」や、「ヨーグルト」等を「見ること」、「星 (*jyotis), 時間 (*muhūrta)」等によって「アートマンが清浄になる」と慢心することであって、「道でないもの」(*amārga) に対して「道」(*mārga) と執著することであり、「戒禁取見」と関わることでありと明言される。この「戒禁取見」との関わりは、上述したように、「愛から取 (=四取) が生ずる」(trṣṇā→upādāna) という十二支縁起の解釈と全く重なっている。すなわち、'kautukamaṅgala' は「愛」(trṣṇā) によって生ずることがこの ŚST の言及によって明瞭である。

さて、戒禁取見を持つ者たちは、「『道でないもの』(*amārga) に対して『道』(*mārga) と執著する (*abhiniveśa)」のであるが、つまり、彼らは、正しくないものを、正しいと考えて 'kautukamaṅgala' という執著を起こすわけである。一方、Dbh でも見てきたように、人は、正しく見ること (正見) によって 'kautukamaṅgala' から離れるのである。すなわち、人は、正しく見ないことによって愛を起こし 'kautukamaṅgala' という執著を起こすのであるが、正しく見ることによって愛は起こらず、'kautukamaṅgala' という執著も起こらない、という構造があることがわかる。この後の ŚST の言及については割愛するが、このような誤った見方は、「遍知されること (*parijñātāni)」(真実でない迷妄した対象と知ること) や、「聖なる慧」によって排除されることが言及されるから⁴⁹、言葉は違うが、やはり「正見」との関わりが理解されうる⁵⁰。

ところで、先の ŚSMT において言及されていた「草を散布すること (*darbha), ヨーグルト

(*dadhi), 牛黄 (*gorocanā), 花 (*puṣpa), 魚 (*matsya), 婆羅門 (*brāhmaṇa), 牛王 (*rṣabha), 星 (*jyotis), 道でないもの (*amārga) 等は, この ŚST の「吉祥 (*maṅgala)」の説明と重なるから, ŚSMT は「吉兆 (*kautuka)」という語に, 吉祥 (*maṅgala) という語の意味を含ませて説明していることが明らかである。

【5 Avadāna 及び Vinaya 文献における kautukamaṅgala】

さて次に, Avadāna 及び Vinaya 文献における ‘kautukamaṅgala’ について見ていくことにする。まず, *Divyāvadāna* (以下, Divy) について見てみよう。

さて次の日, 吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana) をした⁵¹シュローナ・コーティーカーナは母のもとに近づいて, 足元にひざまずいて, 「母さん, 私は行ってきます。御機嫌よろしゅう。大海を渡ってきます」[と] 言った。彼女が泣き出す [ので], 彼が「母さん, なぜ泣くのですか」[と] 言う [と], 涙で顔を曇らせた母は「息子よ, いつ私は息子の生きている姿をまた再び見るであろう」と言った。彼は「私は吉祥 (maṅgala) によって [祈祷して] 出発しようとしている [のに], [母さん] はそのような不吉なこと (amaṅgala) を述べた」[と] 考えた。

怒った彼は「母さん, 吉兆 (kautūhala = kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana) をした私は大海に出発しようとしている [のに], だが, あなたはそのような不吉なこと (amaṅgala) を言う [なんて] 悪い境遇 (apāya) を見ることになりますよ」と言った。[すると] 彼女は「息子よ, あなたの言葉 (vākkaṃman) は乱暴です。罪を罪として言うこと (niścārita) を示しなさい。まさに [それ] だけでも, 以上の業は減少し, 止滅し, 終息するでしょう」[と] 言った。彼女は彼をして謝らせたのである⁵²。

この Divy の言及は大変興味深い。まず, 船出しようとする息子に対して, 母親がもう会えないかもしれないと言ってなげくののだが, 息子はその母親の言動を「不吉なこと (amaṅgala)」と言っている。そう考えると, 「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana)」というのは, 「不吉なこと (amaṅgala)」と対立する考え方であることが明白であるから, 「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana)」とは, 広義の意味での ‘maṅgala’ すなわち「めでたいこと」, あるいは「未来におけるめでたいことを祈ること」だとまとめることができよう。

また, 後半分についてであるが, 息子は, 不吉なこと (amaṅgala) を言った母親に対して, 「悪い境遇 (apāya) を見ることになる」と言って怒るわけだが, それに対して, 母親は息子の言動が乱暴であり罪になるものだとしてわざわざ謝罪させている。つまり, 息子は, 「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana)」という行為をなし, 「不吉なこと (amaṅgala)」を言わないようにしているのであるが, 母親は, そういった行為については全くおかまいなしに, 息子に次もう会えるかどうかわからないという事実を, 事実としてそのまま語るのである。そして,

母親は「乱暴な言葉」を発する息子自身にこそ罪が生ずると言う。この場面では、バラモン教的な考えに従っているのが息子であり、仏教的な考えに従っているのが母親なのだと思える。つまり、「吉兆 (kautuka)」等を行い、「不吉なこと (amaṅgala)」を言わないのが「バラモン教的な善」であり、一方、「不吉なこと (amaṅgala)」であろうが、無常という事実をありのままに無常と言うのが「仏教的な善」である、という両者間の思想的な違いが、ここにはっきり現れている。

なお、シュローナ・コーティーカルナは、この後の旅において、現世で悪趣を見ることになるのだが、その原因は、彼が母親の前で言い放った「乱暴な言葉 (kharavākkarma)」であることが世尊によって語られて、この物語の最後は締めくくられている⁵³。この物語における二人の見方を図示すれば、次のようになる。

〈バラモン教的な見方〉息子	〈仏教的な見方〉母
善 ‘kautukamaṅgalasvastyayana’ をなすこと	無常という事実をありのままに無常と言うこと
悪 ‘amaṅgala’ なことを言うこと	乱暴な言葉を発すること

この図からも明らかなように、Divy において、バラモン教的な見方では、めでたいことを言うのが善、死ぬ等のタブー的なことは言うのは悪なのであるが、仏教的な見方では、無常という事実をありのままに言うことが善、そして、乱暴なことを発することが悪、と捉えられていることがわかる。少なくとも、Divy においては、バラモン教的な意味での ‘maṅgala’ なことも ‘amaṅgala’ なことも、仏教的には全く問題にならないことが語られている。

【5.1 Vinayavastuṭīkā における kautukamaṅgala】

さて、Divy において、「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana)」という三つの概念が出てきたが、これらはどのように説明されるのか。関連する註釈を見ていく。まず、**Vinayavastuṭīkā* (以下、VVT) における ‘kautukamaṅgalasvastyayana’ について見よう。

「吉兆 (*kautuka)」というのは、[身を] 守るために、牛黄 (*gorocanā)・五種の色を塗ること・からし (*sarṣapa) 等を手等につけることである。

「吉祥 (*maṅgala)」というのは、白い花 (*śuklapuṣpa)・ヨーグルト (*dadhi)・牛 (*go)・新しい皿・生肉 (*āmamāmsa) 等を見ることである。

「祈祷 (*svastyayana)」というのは、火 (*agni) に供物を投じて捧げること (*homa)・婆羅門が[ヴェーダを] 読誦すること等によって鎮まることである⁵⁴。

VVT において、「吉兆 (*kautuka)」とは、牛黄 (*gorocanā) や五種の色を「塗ること」、からし等を「つけること」である。一方、「吉祥 (*maṅgala)」とは、白い花 (*śuklapuṣpa)・ヨーグルトなど、つまり、めでたいものを「見ること」である。さらに、「祈祷 (*svastyayana)」とは、

[ヴェーダを] 読誦すること等によって「何かが鎮まること」である。祈祷 (*svastyayana) によって、何が鎮まるのかは次節を見て確認することにしよう。

【5.2 Vinayavibhaṅgapadavyākhyāna における kautukamaṅgala】

次に、*Vinayavibhaṅgapadavyākhyāna (以下、VVP) における 'kautukamaṅgalasvastyayana' について見る。

- (i) [第一解釈] 「吉兆 (*kautuka)」というのは、牛黄 (*gorocanā)・五種の色・白いからし (*śuklasarṣapa) という密呪で清めること (*mantrapariṅhīta) 等という、「吉祥 (*maṅgala) の特徴 (*liṅga)」である。

「吉祥 (*maṅgala) の」というのは、生肉 (*āmamāmsa), 白い花 (*śuklapuṣpa), 牛の乗り物 (*goyāna), 小鼓の音 (*mṛdaṅgaśabda), 象 (*nāga) の鳴き声等という、外の [特徴 (*liṅga)] である。

「祈祷 (*svastyayana)」というのは、火 (*agni) に供物を投じて捧げること (*homa), 婆羅門が [ヴェーダを] 読誦すること等 [によって], 羅刹 (*rākṣasa) を鎮めることである。

- (ii) [第二解釈] あるいは、「吉兆 (*kautuka)」というのは、好ましい原因である。

「吉祥 (*maṅgala)」というのは、好ましくないもの [と] 対になるものである。

「祈祷 (*svastyayana)」というのは、妨げ [から] 守るものである⁵⁵。

VVP においては、二つの解釈がなされていることがわかる。

まず、(i) [第一解釈] のうち、「吉兆 (*kautuka)」の説明における「吉祥 (*maṅgala) の特徴 (*liṅga)」という言葉が不明瞭だが、「吉兆 (*kautuka)」とは「牛黄・五種の色・白いからし」等の「密呪で清めること」のようである。さきほどの VVT の議論では「吉兆 (*kautuka)」は「塗ること」・「つけること」であったが、ここではそれが「清めること」と説明されている。一方、「吉祥 (*maṅgala)」も明瞭ではないが、「外の [特徴 (*liṅga)]」のようであり、おそらく、それ自体でめでたいものなのであろう。そして、「祈祷 (*svastyayana)」については、「読誦すること等 [によって], 羅刹 (*rākṣasa) を鎮めること」という言及がある。つまり、先ほどの「鎮まるもの」とは、「羅刹」のことであることがわかる。

次に、(ii) [第二解釈] のうち、「吉兆 (*kautuka)」とは、「好ましい原因」であり、それを身体につけて「清めること」によって、好ましい結果を期待させる原因、と考えることができる。一方、「吉祥 (*maṅgala)」とは、「好ましくないもの [と] 対になるもの」、すなわち「それそのものが好ましいもの」と言える。「祈祷 (*svastyayana)」については、妨げあるいは障礙から守るもの、すなわち、VVT や VVP の [第一解釈] の言及を考慮すれば、読誦等によって「羅刹」などから身を守る行為なのだと見えよう。

【5.3 Āgamakṣudrakavyākhyāna における kautukamaṅgala】

次に、*Āgamakṣudrakavyākhyāna（以下、AgVy）における ‘kautukamaṅgalasvastyayana’ について見よう。

「吉兆 (*kautuka)」というのは、主^{あるじ} (*svāmin)・子 (*putra)・義兄弟 (*viddhabhrātṛ) 等に対して、幸運 (*śubha) であるために、[旅先へ無事に] 到着する等のために、女性 (*strī) たちによって護持 [するために] 塗ること等が概念設定されること (*prajñapta) [であり]、また、身体の一部に対して牛黄 (*gorocanā) 等が塗られることである。

「吉祥 (*maṅgala)」というのは、知らしめるものである、ヨーグルト (*dadhi) [で満たされた] 瓶 (*kumbha) 等である。

「祈祷 (*svastyayana)」というのは、婆羅門たちが鎮めることである⁵⁶。

AgVy において、「吉兆 (*kautuka)」とは、幸運 (*śubha) のため、あるいは、どこかへ到着するために、身体に「塗ること」のようである。一方、「吉祥 (*maṅgala)」とは、ヨーグルトなどの、「めでたいもの」のようである。「祈祷 (*svastyayana)」とは、婆羅門たちが鎮めることとあるから、上述してきた言及からも明らかなように、火 (*agni) に供物を投じて捧げることや、ヴェーダを読誦することなどによって、羅刹等を鎮めることなのであろう。

【6 まとめ】

以上見てきた ‘kautukamaṅgala’ についてまとめよう。まず、MAvT や YBh の言及を考慮すれば、‘kautukamaṅgala’ とは、「算術家」(gāṇitika) と呼ばれる人々の考えに基づき、「未来の吉兆を占い、様々な儀式・礼拝・供養等をもって願い事をかなえようとする」と言えよう。また、ŚSMT では、‘kautukamaṅgala’ は、実に様々な項目によって説明されているから、広義的には「仏教思想とは異なる、世間の人々が好奇心を抱いたり、興味を持ったり、熱望したり、興奮したりするような活動・関心事」として理解される。また、ŚSMT には「占星術者 (*naimittika)」という人々も登場しており、‘kautukamaṅgala’ は占星術や暦の問題とも深く関わる概念であると言える。

そして、ŚST、VVT、VVP 及び AgVy 等によって ‘kautukamaṅgala’ をそれぞれ個別に定義するならば、まず、「吉兆 (*kautuka)」とは、物語や古事などによって「アトマンが喜ぶと執著すること」、「幸運等のために何かを塗ること・清めること」、そしてそのような「好ましい原因」である。一方、「吉祥 (*maṅgala)」とは、星、時間等によって「アトマンが清浄になると慢心すること」、「好ましいものそのもの」、「めでたいもの」、あるいは、そういったものを「見ること」とまとめることができよう。

このように、‘kautukamaṅgala’ とは、明らかに仏教以外のインド思想にかかわる概念であって、その概念は特に沙門あるいは婆羅門等によって保持されたようであり、それが一般民衆にも受け

入れられていたことが伺われる。だが、本稿で扱った仏教文献では ‘kautukamaṅgala’ が常に否定されていることは注意されるべきである。

‘kautukamaṅgala’ の定義はテキストによって違いはあるが、そういった未来の吉兆を占ったり様々な儀式・礼拝をなしたりする動機は、一体何であろうか。それはやはり、『華嚴經疏』が明確に示しているように、人間の持つ「愛と憎しみ」なのであろう。だが、そういった我々の考え方を DbhV は「虚妄」であると言い、ŚSMT は「四顛倒」であると言い、ŚST は「戒禁取見」であると言う。

なお、Dbh に基づけば、‘kautukamaṅgala’ とは、「正見」によって否定されるべき概念である。「正見」によって、我々の「七種の見解」（七つの誤った見方）が否定され、最終的に、仏・法・僧に対する「確定された意向 (niyatāśaya)」すなわち「確信」が生ずるのである。また、ŚST によれば、「遍知されること (*parijñātāni)」や、「聖なる慧」によって「戒禁取見」等は排除されるのである。

宗教における「信」ということが問題になったとき、「神を信ずるべきか、あるいは、仏を信ずるべきか、いや宗教は科学的に証明されえないのだから何も信じるべきではないのではないか」と現代人は考えるかもしれない。だが、Dbh によれば、ある人に仏・法・僧に対する「確信」が生ずるのは、まずその人に「正見」が生じているからである。そして、その「正見」によって、「愛と憎しみ」が否定され、そして、‘kautukamaṅgala’ によって示されるような、様々な占いや迷信や儀式が否定されるのである。「盲目的に信じる」のではなくて、あくまでも「正見に基づいて信じる」という、ごく当たり前のことを仏教文献は我々に伝えている。

このように、本稿で扱った仏教文献を見れば、仏教思想というのは、吉兆であるとか不吉であるとかいう考え方については全く問題にしないどころか、それをむしろ「正見」によって強く否定していたことがわかる。「不吉ことは言わないようにする」という文化はインドだけではなく、日本にも存在するように思われるが、Divy に見たように、例えば「次もう会えるかどうかわからない」というようなことは、無常なる事実を、無常なる事実として示すことであるから、仏教的には正しい見方である。そもそも釈尊自身が「諸行無常」と言っておられるのであるから、吉兆も不吉もないのである。仏教的に見ても科学的に見ても、現前たる事実として、我々の心も身体もまわりの状況も、一瞬たりとも休むことなく常に変化し続けるのであり、我々はまずその事実をありのままに受け止めねばならないのである。このような ‘kautukamaṅgala’ を否定するという仏教徒の態度を通じて、原始仏教以来ずっと説かれ続けてきた、無常なる事実をありのままに見るといふ仏教思想の基本的な考え方が見えてくる。

Abbreviations and Literature

Abbreviations

AgVṃ *Āgamakṣudrakavyākhyāna (Tib. *Lung phran tshogs kyi rnam par bshad pa*): D 4115 (Dzu 1b1-

232a5), P 5617 (Zhu 1b1-276a8).

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu).
(a): Prahlad Pradhan, ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Tibetan Sanskrit Works Series 8. Patna: Jayaswal Research Institute, 1967.
(b): Swami Dwarikadas Shastri, ed. *Abhidharmakośa & Bhāṣya of Ācārya Vasubandhu with Sphuṭārthā Commentary of Ācārya Yaśomitra*. Bauddha Bharati Series 5, 6, 7, 9(1970, 71, 72, 73). Reprinted in Varanasi, 1987.
- AKV *Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra).
(a): U. Wogihara, ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*. Tokyo, 1932-36. Reprinted in 1989.
(b): Swami Dwarikadas Shastri, ed. See AKBh (b).
- AKV(Tib) *Abhidharmakośaṭīkā* (Yaśomitra) (Tib. *Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad*): D 4092 (chap. 1-3: Gu 1b1-330a7; chap. 4-9: Ņu 1b1-330a7), P 5593 (chap. 1-3: Cu 1b1-383a6; chap. 4-9: Chu 1b1-408a8).
- BAMS(Tib) **Buddha-avatamsaka-nāma-mahāvaiṣṭhā-sūtra* (Tib. *Sangs rgyas phal po che zhes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo*). D 0044 (Kha 1b1-396a6). P 0761 (Li 1b1-277a4).
- BBh U. Wogihara, ed. *Bodhisattvabhūmi: a statement of whole course of the Bodhisattva (being fifteenth section of Yogacarabhūmi)*. Originally published: 1936. Reprinted in Sankibo Buddhist Book Store, 1971.
- BBh(Tib) **Yogacaryābhūmau bodhisattvabhūmi* (Tib. *Rnal 'byor spyod pa'i sa las byang chub sems dpa'i sa*): D 4037 (Wi 1b1-213a7), P 5538 (Zhi 1b1-247a8).
- BBhVy **Yogacaryābhūmau bodhisattvabhūmivyākhyā* (Tib. *Rnal 'byor spyod pa'i sa las byang chub sems dpa'i sa'i rnam par bshad pa*): D 4047 (Yi 1b1-338a7), P 5548 (Ri 1b1-425a6).
- D Derge edition of Tibetan Tripiṭaka.
- Dbh *Daśabhūmikasūtra*.
(a): Rahder, Johannes, ed. *Daśabhūmikasūtra*. Leuven: J.-B. Ista, 1926.
(b): Kondo, Ryuko, ed. *Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram*. Kyoto: Rinsen book, 1936.
- Dbh(Tib) See BAMS(Tib).
- DbhV **Āryadaśabhūmivyākhyāna* (Tib. *'phags pa sa bcu'i rnam par bshad pa*): D 3993 (Ņi 103b1-266a7). P 5494 (Ņi 130b3-335a4).
- DbhVV **Daśabhūmivyākhyānavyākhyāna* (Tib. *Sa bcu'i rnam par bshad pa'i rnam par bshad pa*): D 3998 (Ji 1b1-119b4). P 5499 (Ji 1b1-142b2).
- Divy Cowell, E. B. and Neil, R. A., eds. *The Divyāvadāna—A Collection of Early Buddhist Legends—*. Orig. pub., 1886. Reprinted in Delhi: Indological Book House, 1987.
- Ko Kondo, Ryuko. See Dbh(b).

- MAvBh **Madhyamakāvātārabhāṣya* (Tib. *Dbu ma la 'jug pa'i bshad pa zhes bya ba*): D 3862 (Ha 220b1-348a7). P 5263 (Ha 264b8-411b1).
- MAvT **Madhyamakāvātāraṅkā* (Tib. *Dbu ma la 'jug pa'i 'grel bshad ces bya ba*): D 3870 (Ra 1b1-365a7). P 5271 (Ra 1b1-443a6).
- NS *Nidānasamyukta*. See Tripāthī [1962]. (*Nidānasamyukta* のスートラ番号については, Tripāthī [1962] に従う.)
- P Peking edition of Tibetan Tripiṭaka.
- Pr Pradhan, ed. See AKBh (a).
- PrP *Prasannapadā* (Candrakīrti).
(a): L. de la Vallée Poussin, ed. *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*. Bibliotheca Buddhica 4. 1903-13. Reprinted in Tokyo, 1977.
(b): P. L. Vaidya, ed. *Madhyamakaśāstra of Nāgārjuna*. Buddhist Sanskrit Texts 10. Darbhanga, 1960.
- PrP(Tib) *Mūlamadhyamakavṛttiprasannapadā* (Tib. *Dbu ma rtsa ba'i 'grel pa tshig gsal ba zhes bya ba*): D 3860 (Ha 1b1-200a7), P 5260 (Ha 1b1-225b7).
- Rah Rahder, Johannes. See Dbh(a).
- Śāli *Śālistambasūtra*. See PrP (a), PrP (b) and Śāli (Vai).
- Śāli (Vai) P. L. Vaidya, ed. *Śālistambasūtra*. See Vaidya [1961].
- Sh Shastri, Swami Dwarikadas. See AKV(b).
- Sn Andersen, Dines & Smith, Helmer, ed. *Suttanipāta*. Oxford: Pali Text Society, 1913. Reprinted in 1990.
- ŚSMT **Ārya-Śālistambaka(-nāma) mahāyānasūtraṅkā* (Tib. *'phags pa sā lu ljang pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo'i rgya cher bshad pa*): D 3986 (Ñi 20b4-55b3), P 5486 (Ñi 25a6-69a6).
- ŚST **Ārya-Śālistambakaṅkā* (Tib. *'phags pa sā lu ljang pa rgya cher 'grel pa*): D 4001 (Ji 145b5-163b4), P 5502 (Ji 174b1-196b2).
- T 『大正新脩大藏經』.
- VVP **Vīṇayavibhaṅgapadavyākhyāna* (Tib. *'dul ba rnam par 'byed pa'i tshig rnam par bshad pa*): D 4114 (Tshu 1b1-207a7), P 5616 (Wu 1b1-251a8).
- VVT **Vīṇayavastuṅkā* (Tib. *'dul ba gzhi rgya cher 'grel pa*): D 4113 (Tsu 177a5-326a7), P 5615 (Dzu 192b6-381a5).
- W Wogihara, U. See AKV(a).
- YBh *Yogāccārabhūmi* (Asaṅga): Vidhushekhara Bhattacharya, ed. *The Yogāccārabhūmi of Ācārya Asaṅga*. Part 1. University of Calcutta, 1957.
- 聖典全 See 教学伝道研究センター.

- 『入中論疏』 See MAvT.
『入中論註』 See MAvBh.

Literature

Reat, N. Ross

- 1993 The Śālistamba sūtra—Tibetan original, Sanskrit reconstruction, English translation, critical notes (including Pali parallels, Chinese version, and ancient Tibetan fragments) —. Delhi: Motilal Banarsidass.

Tripāṭhī, Chandrabhāl

- 1962 *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamṃyukta*. Sanskrit texte aus den Turfanfunden 8. Berlin: Akademie-Verlag.

Vaidya, P. L.

- 1961 Mahāyāna-sūtra-saṃgraha. Buddhist Sanskrit Texts 17. Dharbhanga: The Mithila Inst. of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

瓜生津隆真・中沢 中

- 2012 『全訳チャンドラキールティ入中論』 浦安：起心書房.

大竹晋校

- 2005 『十地経論 I』 『新国訳大蔵経 14 釈経論部 16』 東京：大蔵出版.

小川一乗

- 1976 『空性思想の研究—入中論の解説—』 京都：文栄堂書店.

片山一良

- 2003 『戒蘊篇 II』 『パーリ仏典 長部 (ディーガニカーヤ)』 第二期 2. 東京：大蔵出版.

教学伝道研究センター

- 2011 『浄土真宗聖典全書 二 宗祖篇 上』 京都：本願寺出版社.

楠本信道

- 1999 「大乘莊嚴経論における ‘adhimukti’ の意味」 『印仏研』 47(2) : 113-115.
2007 『『俱舍論』 における世親の縁起観』 京都：平楽寺書店.

中村 元

- 1984 『ブッダのことば—スッタニパーター—』 『岩波文庫』 33-301-1.

林 隆夫

- 1991 「叙事詩マハーバーラタと算術」 『インド思想における人間観』 京都：平楽寺書店. pp.3-28.

平岡 聡

- 2007 『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』 全訳—』 上. 東京：大蔵出版.

村上真完・及川真介

1986 『仏のことは註（二）—パラマッタ・ジョーティカー—』東京：春秋社。

2009 『パーリ仏教辞典』東京：春秋社。

横山紘一・広沢隆之

1996 『漢梵蔵対照 瑜伽師地論総索引』東京：山喜房仏書林。

*本稿は、筑紫女学園大学・短期大学部平成25年度特別研究助成（指定研究助成）による研究成果の一部である。

注

¹ 聖典全二・二三九は、「晉譯華嚴經卷二四 十地品」と補う。なお、この「又言～抄出」までの二十字の言及は西本願寺本と高田本にはあるが、真蹟本には欠く。

² 例えば、*Suttanipāta*（以下、Sn）p.63 の 360偈（二・一三 正遊行経（*Sammā-paribbājaniya-sutta*）の第2偈）では次のように言及される。“yassa maṅgalā samūhatā ti bhagavā uppādā supinā ca lakkhaṇā ca, sa maṅgaladosavippahīno bhikkhu sammā so loke paribbajeyya”（世尊は[言われた]。[吉祥[占い]（maṅgala）、変事（天変地異）[占い]（uppāda）、夢[占い]（supina）、相[占い]（lakkhaṇa）を除去した者は、吉祥[占い]の誤謬（maṅgaladosa）を捨てた者である。その比丘は、正しく（sammā）世間に遍歴するであろうと）。詳細については、中村[1984: 76]、及び村上・及川[1986: 639-640]参照。

なお、360偈では、‘maṅgala’を「吉祥[占い]」と訳したが、‘maṅgala’が肯定的な意味で用いられる例がSn pp. 46-47の 258-269偈（二・四 大吉祥経（*Mahāmaṅgala-sutta*））に見られる。そこでは「最高の吉祥」（maṅgalam uttamam）について言及されるが、それが何かということ、中村[1984: 57-59]に基づいてまとめると、次のようになる。

「259—諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人々を尊敬すること、260—適当な場所に住み、あらかじめ功德を積んでいて、みずからは正しい誓願を起していること、261—深い学識あり、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学び、ことばがみごとであること、262—父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、263—施与と、理法にかなった行いと、親族を愛し護ること、非難を受けない行為、264—悪をやめ、悪を離れ、飲酒をつつしむ、徳行をゆるがせにしないこと、265—尊敬と謙遜と満足と感謝と（適当な）時に教えを聞くこと、266—耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、適当な時に理法についての教えを聞くこと、267—修養と、清らかな行いと、聖なる真理を見ること、安らぎ（ニルヴァーナ）を体得すること、268—世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること」。

以上が「最高の吉祥」としてSnでは言及される。ここに列挙される個々の項目は、釈尊が仏教的な意味で再定義した‘maṅgala’を意味していると考えられる。少なくともSnを見る限り、「吉祥」（maṅgala）というのは、インド思想的な意味で占い等の意味で用いられる場合は否定され、仏教的な意味で再定義される場合は肯定されることがわかる。なお、大吉祥経の註釈については、村上・及川[1986: 390-442]

を参照されたい。

³ この『六十華嚴』の言及は、鳩摩羅什及び佛陀耶舍訳『十住經』(T. 286, 10, 504c17)の言及と全く同じである。

⁴ Rah: samyakpathagataḥ.

⁵ Dbh(Tib) D 189a3; P 73a1: yang dag par lta ba dang ldan zhing ngo mtshar dang bkra shis dang / ngang tshul ngan pa'i lta ba sna tshogs dang bral ba yin te / lta ba drang zhing g-yo med la sgyu med pas sangs rgyas dang / chos dang dge 'dun la bsam pa nges pa yin /.

⁶ “samyagdrṣṭiḥ khalu punar bhavati / samyakpathānugataḥ”について、藏訳は“yang dag par lta ba dang ldan zhing”(samyagdrṣṭyanugataḥ)と訳す。

⁷ Dbh(Tib) は「吉兆 (kautuka)・吉祥 (maṅgala)・悪戒 (kuśīla) に関する、様々な種類の見解を離れることである」(ngo mtshar dang bkra shis dang / ngang tshul ngan pa'i lta ba sna tshogs dang bral ba yin te) と訳し、kautuka・maṅgala・kuśīlaを並列的に訳す。これを考慮すれば、藏訳者の見た梵語は“kautukamaṅgalakuśīlanānāprakāradrṣṭivigataḥ”であった可能性がある。だが、DbhV (**Āryadaśabhūmivivākyāna*) は、“dge mtshan dang / bkra shis rnam pa sna tshogs dang / tshul khirms ngan pa'i lta ba dang bral ba”と訳し、MAvBh (**Madhyamakāvātārahāśya*) も、“dge mtshan dang bkra shis rnam pa sna tshogs dang / tshul khirms ngan pa'i lta ba can dang bral ba”と訳しているから、これらの訳の方が、“kautukamaṅgalanānāprakāradrṣṭivigataḥ”という梵語によく対応する。

⁸ 『六十華嚴』及び『十住經』が「習行正見」と訳している部分を、親鸞は上述した「化身土卷末」においては「修習正見」と言及する。

⁹ 'niyatāśaya' は*Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) に言及される 'abhisampratyaya' (確信) とほぼ同じ性質のものと見てよいであろう。そのように解釈すれば、『六十華嚴』や『十住經』で「決定深信罪福因縁」と説明されていることもよく理解できる。AKBh Pr 55.6; Sh 188.9: tatra śraddhā cetasaḥ prasādāḥ / satyaraṭnakarmaphalābhisampratyaya ity apare / (それ [ら十の法] のうち、信とは心の清浄である。[四] 諦・[三] 宝・業と [その] 果に対する確信である、と他の人々は [言う])。なお、*Saddharmapuṇḍarīka* では、如来が衆生たちの adhimukti と āśayaを知った後に法を説くことが言及され、'āśaya' という語は 'adhimukti' と近い意味で用いられることがある。'adhimukti' という語の詳細については楠本 [1999] 等参照。

¹⁰ 「七種の見解 [の対治のうち]」と訳した 'lta ba rnam pa bdun ni' について、直訳すれば、「七種の見解は」であるが、次に続く「かの別の乗」云々は、七種の見解の対治のうちの第一のものであるから、このように補って訳した。なお、DbhVV にも、“de la theg pa gzhan la lta ba'i gnyen por yang dag pa'i lam la gnas” とあるから、この註釈に基づいても、このように訳すべきである。DbhVVについては、脚注19参照。

¹¹ DbhV D 159b3; P 204b1: yang dag pa'i lta ba ni lta ba rnam pa bdun gyi gnyen por yongs su bstan te / lta ba rnam pa bdun ni theg pa gzhan la lta ba de'i gnyen por yang dag pa'i lam la gnas zhes bya ba gsungs so // yongs su rtog pa bzang po ma yin pa'i lta ba dang / tshul khirms tsam gyis rnam par dag par lta ba de'i gnyen por dge mtshan dang / bkra shis rnam pa sna tshogs dang / tshul khirms ngan pa'i lta ba dang bral ba zhes gsungs pa'o // de la tshul khirms tsam gyis rnam par dag par lta ba ni bdag tu lta ba mchog tu 'dzin pa'i tshul khirms yin par rig par bya'o // bdag gi

mchog tu 'dzin pa'i lta ba de'i gnyen por lta ba drang zhes gsungs so // 'chab pa'i lta ba dang / brdzun du brjod pa'i lta ba de'i gnyen por g-yo med la sgyu med pas zhes bya ba gsungs so // 'jig rten pa'i ma dag pa'i lta ba de'i gnyen por sangs rgyas dang / chos dang / dge 'dun la bsam pa nges pa yin no zhes bya ba gsungs so //.

¹²『十地經論』T. 1522, 26, 148a16: 經曰。離於邪見隨順正道。捨於種種占相吉凶。離惡戒見修正直見。不姦欺不諂曲。決定誠信佛法僧寶。菩薩如是日夜常護十善業道

論曰。依正見有七種見對治。何者七種見。一者異乘見。此對治。如經隨順正道故。二者虛妄分別見。三者戒取淨見。此對治。如經捨於種種占相吉凶離惡戒見故。惡戒見者。自取所見故。四者自謂正見。此對治。如經修正直見故。五者覆藏見。六者詐現不實見。此對治。如經不姦欺不諂曲故。七者非清淨見。謂世間見。此對治。如經決定誠信佛法僧寶故。

經に[次のように]説かれている。「邪見を離れて、正道に従い、種々の占相と吉凶 (kautukamaṅgala) を捨て、悪戒見を離れ、正直見を修し、騙すことがなく (*amāyāvin, 不姦欺)、へつらいがなく (*aśaṭha, 不諂曲)、佛・法・僧の[三] 寶を決定して誠信し、菩薩はこのように日夜常に十善業道を護り」と。

論じて[以下のように]言う。「正見に依って七種の見の対治[があるの]であるが、七種の見とは何か。一には、(1)異乗に関する見である。この対治[として]、『[十地] 經』に「正道に従い」と[世尊はお説きになられている]からである。二には、(2)虚妄分別見である。三には、(3)戒取淨見である。この対治[として]、『[十地] 經』に「種々の占相と吉凶 (kautukamaṅgala) を捨て、悪戒見を離れ」と[世尊はお説きになられている]からである。「悪戒見」とは、(3)自取所見(我見を最勝として取る戒)であるからである。四には、(4)自謂正見である。この対治[として]、『[十地] 經』に「正直見を修し」と[世尊はお説きになられている]からである。五には、(5)覆藏見(覆 (*mrakṣa) に関する見解)である。六には、(6)詐現不實見(非真實 (*anṛta) に関する見解)である。この対治[として]、『[十地] 經』に「騙すことがなく (*amāyāvin, 不姦欺)、へつらいがなく (*aśaṭha, 不諂曲)」※と[世尊はお説きになられている]からである。七には、(7)非清淨見(世間の人々の汚れた (*aśuddha) 見解)である。すなわち、世間の見である。この対治[として]、『[十地] 經』に「佛・法・僧の[三] 寶を決定して誠信し」と[世尊はお説きになられている]からである。

※「騙すことがなく (*amāyāvin, 不姦欺)、へつらいがなく (*aśaṭha, 不諂曲)」と訳した「不姦欺不諂曲」については、DbhV に従えば、「不姦欺」を(6)詐現不實見に、「不諂曲」を(5)覆藏見に対応させるべきであるが、漢訳ではこの順番が前後しており、藏訳と解釈が異なっていることがわかる。なお、^{しらだつま}戸羅達磨の『佛説十地經』(T. 287, 10, 543a06)は「無諂無誑」と訳し、藏訳と同じ順番で説明する。一方、^{じつしゃなんだ}實叉難陀の『大方廣佛華嚴經』(『八十華嚴』T. 279, 10, 185b25)は「無誑無諂」という順番で説明し、また、澄觀の『大方廣佛華嚴經疏』(『華嚴經疏』T. 1735, 35, 774b14)もこの順番で説明している(「五無誑者。治覆藏見。六無諂治詐現不實見」)。したがって、『八十華嚴』と『華嚴經疏』の両者は^{ぼだいるし}菩提流支訳『十地經論』と同じ順番で説明しており、藏訳の順序と異なっていることがわかる。漢訳語と藏訳語の対応については、大竹[2005: 243-244]が非常に有効なので参照されたい。

なお、「自取所見」と「自謂正見」の違いがわかりにくいのが、前者は「外道の立てた「我見」(*ātmaḍṛṣṭi)等を最高のものとする見(=戒盜、戒取、戒禁取見、*śīlavrataparāmarśa)」であり、後者は「自分で勝手に

考えたことを最高のものとする見 (=見盜, 見取, *dr̥ṣṭiparāmar̥sa)」であると考えられる。

¹³ 『十地論義疏』 T. 2799, 85, 778c16: 虚妄者。以生死爲生死。以涅槃爲涅槃。不能涅槃生死無二也。

¹⁴ 『華嚴經疏』 T. 1735, 35, 774b11: 二不行占卜。治虚妄分別見即是邪見。夫吉凶悔吝由愛惡生。故云虚妄。

¹⁵ 澄觀の考え方は、彼のオリジナルなのではなく、むしろ原始仏教にも共通する考え方と言える。例えば、Sn p.63 の 363偈 (二・一三 正遊行経 (*Sammā-paribbājanīya-sutta*) の第5偈では次のように言及される。“hitvāna piyañ ca appiyañ ca anupādāya anissito kuhiñci saṃyojanīyehi vipparamutto sammā so …” (好ましいもの (piya) も好ましくないもの (appiya) も捨てて、執着せず、何ものにも依存せず、諸々の束縛されたもの (saṃyojanīya) から解放された彼は、正しく (sammā) [世間に遍歴するであろう])。]

脚注2で示したように、正遊行経では、Sn 360偈で、「吉祥 [占い] (maṅgala)」等を除去した比丘が、正しく世間に遍歴することが述べられ、Sn 363偈では、「好ましいもの (piya) も好ましくないもの (appiya) も捨てた」者も正しく世間に遍歴することが述べられているから、「吉祥 [占い] (maṅgala) 等を除去すること」と、「好ましいもの (piya) と好ましくないもの (appiya) とを捨てること」とは、パーリ文献においても、非常に似通った文脈で言及されていることがわかる。さらに、Sn 363偈で「執着せず」と訳した 'anupādāya' について、Sn の註釈は 'cattāri upādānāni' すなわち「四取」と説明する (村上・及川 [1986: 642, 658, fn. 32] 参照)。したがって、Sn において「吉祥 [占い] (maṅgala)」と「四取」もまた、緊密な関係にあることが明らかである。

¹⁶ 「取」(upādāna) という概念については、楠本 [2007: 54, 181-184] 参照。

¹⁷ 『漸備一切』T. 285, 10, 466b2: 又棄邪見。奉于正見。不墮外學。捨于貪事虚偽之術。吉良之日。不擇時節。不思國位。若觀帝主。不以爲貴。不懷諛諂。表裏相應心性仁和。奉佛法衆不失三寶。

¹⁸ 「七種の見解」について、例えば、(1)について言えば、『漸備一切』は「仏教以外の教え (外學)」と言っているが、DbhV は「別の乗 (*yāna)」と説明し、対象を小乗仏教と解釈している。このように註釈等を詳細に比較すると、解釈がそれぞれ異っていることは注意すべきである。

¹⁹ 解説を以下挙げておく。DbhVV D 48b1; P 55a6: de la theg pa gzhan la lta ba'i gnyen por yang dag pa'i lam la gnas zhes bya ba yin no // gnyis pa dang gsum pa ni bshad zin pa nyid do // bdag gi mchog tu 'dzin pa'i gnyen por lta ba drang zhes bya ba yin no // ji lta zhe na / glang po 'tsho bzhin du rang gi shes rab kyi stobs kyis bdag la btsan du byas na snyems par byed / tshig gi don rnam par 'god par byed pa ni ma yin gyi / 'on kyang bla mas lung ji ltar byin pa de bzhin du lam [P 55b] drang pos don gyi rjes su 'brang ba'i phyir ro // 'chab pa'i lta ba ni gnyen por g-yo med ces bya ba yin te / g-yos rang gi nyes pa 'chab pa'i phyir ro // brdzun du brjod par lta ba'i gnyen por sgyu med pa zhes bya ba yin te / sgyus spyod lam la sogs pas sbyin bdag la sogs pa la yang dag pa ma yin pa'i yon tan rab tu ston pa'i phyir ro // 'jig rten pa'i lta ba'i gnyen por sangs rgyas la sogs pa la bsam pa nges pa zhes bya ba yin te / 'di ltar mu stegs dang bram ze la sogs pa dag la rten gyi sangs rgyas la sogs pa dag la gcig kho nar dad pa ma rnyed pas de dag la mi 'jug pa'i phyir ro // 'di lta ste mam pa thams cad dang skyon med pas ni de ltar mchog tu byung ba'i tshul khirms dang rang bzhin gyi tshul khirms yongs su bstan pa yin te go rims bzhin no // (それ[ら七つ]のうち、(1)[かの] 別の乗 (*yāna) に関する見解の対治 (*pratipakṣa) として、『正しい道に従い (samyakpathānugata)』と [Dbhで言われている]、第二 [の見] と第三 [の見] はまさに [DbhVで] すでに説かれた。(4) [かの]

我れに執著する〔見解〕(*ātmaparāmarśa[-dr̥ṣṭi] 自謂正見)の対治(*pratipakṣa)として、『正直な見解(r̥judr̥ṣṭi)』と〔Dbhで言われている〕。なぜか。生きている象のように、自分の知力が強力なときに傲慢に〔考えて〕、語(*pada)の意味を取り決める(*vinyāsa)というのではなくて、そうではなくて、師匠(*guru)によって与えられたままの聖典のように、導かれた道によって内容(*artha)に従うからである。(5)覆(*mrakṣa)に関する見解〔の〕対治(*pratipakṣa)として、「へつらいがない(aśaṭha, 無諂)」と〔Dbhで言われている〕のであり、へつらい(aśaṭha)によって自分の誤りを隠す(*mrakṣa, 覆)からである。(6)非真実(*anṛta)に関する見解の対治(*pratipakṣa)として「騙すことがない(amāyāvin, 無誑)」と〔Dbhで言われている〕のであり、騙すこと(māyāvin, 誑)による品行(*īryāpatha)等によって、施主(*dānapati)等に対して、非真実な功德(*guṇa)が示されるからである。(7)世間の人々の〔汚れた(*aśuddha)〕見解の対治(*pratipakṣa)として、「仏等に対する〔確定された〕意向(āśaya)」と〔Dbhで言われている〕のであり、すなわち、異教徒(*tīrthika)や婆羅門(*brāhmaṇa)等にとって、〔仏教徒の〕依り所(*adhikaraṇa)である仏等に対して、全面的に(*ekāntena)信ずること(śraddhā)は獲得されない(*alābha)から、彼らにとって〔仏・法・僧に対する確定された意向(niyatāśaya)は〕生じないからである。すなわち、あらゆる種類と誤りはない(*adoṣa)から、以上のように、卓越した戒(*utkr̥ṣṭaśīla or *prakr̥ṣṭaśīla)と本性的な戒(*prakr̥ṣṭiśīla, 本性戒)を説示するのであり、順次に(*yathākramam)〔説示するの〕である。

²⁰ MAVBh D 232a7; P 279a2: log par lta ba spangs pa yang yin te / [D 232b] yang dag par lta bar gyur la yang dag pa'i lam la gnas shing / dge mtshan dang bkra shis nmam pa sna tshogs dang / tshul khirms ngan pa'i lta ba can dang bral ba yin te / lta ba drang zhing g-yo med la sgyu med pas / sangs rgyas dang / chos dang dge 'dun la bsam pa nges pa yin no zhes bya ba la sogs pa gsungs pa lta bu'o //

²¹ 「算術家」と訳した 'rtsis byed pa' について、横山・広沢 [1996: 1113] (曆算者 gānitika, Yo. 159-16, 7. 312, rtsis byed pa)を参照して、もとの梵語は 'gānitika' であろうと解釈したが、'gaṇaka' という語形であった可能性もある。なお、'gaṇaka' について、林 [1991: 16] は「後世の天文学書では、『算術士』(gaṇaka)は数学のできる人、特にホロスコープ占星術や天文暦法の計算のできる人を指すことが多い」と指摘する。つまり、インド思想において、'gānitika' や 'gaṇaka' という人々は「占星術師」とも言いうる存在であり、しかも、彼らは、計算を用いて占星を行う人々であったことが伺われる。

²² 「説示」と訳した 'bstan pa' は、内容としては Dbh の「吉兆(kautuka)と吉祥(maṅgala)、そして悪戒(kuśīla)」を意味する。

²³ MAVT D 91a2; P 108a8: yang dag pa'i lam [P 108b] la gnas shing zhes bya ba ni yang dag pa'i lta ba nyid bde 'gro'i lam yin pas yang dag pa'i lam yin la / de la gnas pa'o // dge mtshan dang zhes bya ba ni rtsis byed pa ste / des ma 'ongs pa yongs su shes pa'i phyir ro // bkra shis zhes bya ba ni lam du 'jug pa la sogs pa mtshan ma bzang po lta ba gang yin pa'o // ngang tshul ngan pa'i lta ba sna tshogs dang bral ba yin te zhes bya ba ni mu stegs pa'i bstan bcos las bstan pa'i lta ba sna tshogs pa ste / de dang bral ba'o // lta ba drang zhes bya ba'i bshad pa ni g-yo med la sgyu med pas zhes bya ba ste / de la g-yo ni mnyed pa dang bkur sti la zhen cing 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug gi cha dang ldan par rang gi yon tan ji lta ba bzhin du mi ston par yang dag par gdams ngag ster ba la gegs byed pa gang yin pa'o // de dang bral ba ni g-yo med pa'o // sgyu ni mnyed pa dang bkur sti la zhen cing 'dod chags dang / zhe

sdang dang / gti mug gi cha dang ldan pa yang dag pa ma yin pa'i yon tan ston par byed pa log par 'tsho ba'i rten byed pa'i las can no // bsam pa nges pa yin no zhes bya ba ni dkon mchog gsum yod pa la sogs par nges par lta ba'o //.

²⁴ Candrakīrtiの著作に対する Jayānanda の注釈態度について、小川 [1976: 9] は「あまりにも忠実な逐語的注釈の姿勢に徹しているために Jayānanda の学問的個性が顕在化せずに終わっている」と言及している。Jayānanda が Candrakīrti の説明に忠実だとすれば、Jayānanda の解説と Vasubandhu の解説の違いというのは、Candrakīrti と Vasubandhu の経典に対する解釈態度の違いによる、とも言いうるかもしれない。

²⁵ 蔵訳 'rgyu skar' より「ナクシャトラ (*nakṣatra)」と補う。なお、漢訳には「星宿」という訳が見え、梵語にだけ 'nakṣatra' の語が欠けている。

²⁶ 「彼 [ら]」と訳した 'sa' について、対応する蔵訳は 'de dag' とあり、複数で訳す。

²⁷ 「草を散布すること」と訳した 'darbha' について、Bhattacharyaのテキストでは 'ādarśa' となっているが、蔵訳は 'rtsva dar ba' (草を散布すること)と訳し、漢訳は「安置茅草」と訳す。蔵訳と漢訳に従えば、'ādarśa' を 'darbha' と訂正すべきである。なお、'darbha' について、『漢訳対照梵和大辞典』(荻原 [1979: 570])は、「叢; 祭式に用ふる草 [特にKuśa 草、之を撒布・拂拭并に他の用途に用ふ。]」云々と説明する。

²⁸ 「礼拝させる」と訳した 'pratyupasthāpayati' について、蔵訳は 'nye bar 'jog ste' と訳す。なお、nye bar 'jog pa'について Sarat Chandra Das は 'lit. to stand near; to worship, to wait upon.' と説明する。

²⁹ YBh 159.11: kautukamaṅgalavādaḥ katamaḥ / yathāpīḥaikatyah śramaṇo brāhmaṇo vaivamdr̥ṣṭir bhavaty evaṃvādī ādityacandragrahatithivaigunyena manorathānām asiddhir bhavati / tadānugunyena ca manorathasiddhiḥ / sa tadarthaṃ cādityāpīpūjām prakalpayati / homajāpadarbhapūrnakumbhabilvaphalaśaṅkhādīn pratyupasthāpayati / tadyathā gāṇitikāḥ /.

³⁰ *Abhidharmakośavyākhyā* (以下、AKV) には 'kautukamaṅgala' が「太陰日 (tithi) と、時間 (muhūrta) と、星宿 (nakṣatra)」とは別概念として言及されるから、'kautukamaṅgala' の定義は、テキストによって一致しないようである。AKV W 420.8; Sh 713.25: vividhadr̥ṣṭineti kautukamaṅgalatithimuhūrtanakṣatrādir̥ṣṭinā / (「種々の [悪] 見を有する [在家の人々] によっては」とは、吉兆 (kautuka) と、吉祥 (maṅgala) と、太陰日 (tithi) と、時間 (muhūrta) と、星宿 (nakṣatra) 等の見を有する [在家の人々] によっては、である。)

なお、「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) である、太陰日 (tithi) と、時間 (muhūrta) と、星宿 (nakṣatra)」と訳しうるならば、「太陰日 (tithi) と、時間 (muhūrta) と、星宿 (nakṣatra)」等は 'kautukamaṅgala' に含めうるが、蔵訳は "kautukamaṅgalatithimuhūrtanakṣatra" を「並列複合語」で解釈している。AKV (Tib) D 69b5; P 77b4: lta ba sna tshogs pa'i zhes bya ba ni ngo mtshar dang / bkra shis dang / tshes grangs dang / yud tsam dang / rgyu skar la sogs pa'i lta ba can gyi'o //.

³¹ 「大なる恐ろしい祭式 (mahāraudrayajña, 廣大暴悪祠祀) において、殺生による布施を以て」と訳した "mahāraudrayajñeṣu...himsādānena" について、蔵訳は、"gnod pa chen po'i mchod sbyin rnams dang / 'tsho ba'i sbyin pas" と訳すから、"mahāraudrayajñādānena...himsādānena" (「大なる恐ろしい祭式 (mahāraudrayajña, 廣大暴悪祠祀) [における] 布施と、殺生による布施を以て」と) と解釈していることがわかるが、訳は梵語に従っておく。

³² BBh p. 120, ll. 22-26: na cāsaddrṣṭyā parāmrṣṭam dānaṃ dadāti / tadyathā mahāraudrayajñeṣu na hiṃsādānena dharmam pratyeti / nāpi kautukamaṅgalapratisaṃyuktaṃ dānaṃ dadāti / nāpi suviśuddhenāpi sarvākāreṇa dānamātrakeṇa laukikalokottarām vairāgyaviśuddhiṃ pratyeti /.

³³ BBhVy D 140a6; P 172a2: 'tshes ba'i sbyin pas zhes bya ba la sogs pa la / lha'i rigs la sogs pa dge mtshan dang bkra shis dang mi ldan du zin kyang nyi ma dang rgyu skar la sogs pa rnam par rtog pa'i sbyor bas so // tshul khriṃs dang brtul zhugs mchog tu 'dzin pa'i lta ba sngon du song ba yin na yang dgag par bya ba'i phyir / shin tu rnam par dag pas kyang zhes bya ba la sogs pa ni thar par yongs su bsngos pa yin na yang zhes bya ba'i [D 140b] don to //.

³⁴ Poussinは、PrP (a) p. 594, fn. 6 で 'Madhyamakāvātāra' (正確に言えばMAvBh) を参照するように言及するが、MAvBh に引用されるのは、先に見たDbhである。当該の PrP で言及されているのは、Dbhではなく、Śāli であることが、PrP で言及される。なお、Śāli については、Reat [1993: 72] を、また、NS 14 については、Tripāṭhī [1962: 147-152] 及び楠本 [2007: 279-281] 参照されたい。

³⁵ PrP (a) and PrP (b) omit 'sattvavādapratisaṃyuktāni'. Śāli (Vai) has 'sattvavādapratisaṃyuktāni'.

³⁶ PrP (a) and PrP (b) omit 'pudgalavādapratisaṃyuktāni'. 'pudgalavādapratisaṃyuktāni' に対応する語は、PrP (a), PrP (b) 及びNS14に欠くが、PrPの蔵訳 (gang zag tu smra ba dang ldan pa) 及びŚāli (Vai)よりこの語を補う。

³⁷ PrP (a) and PrP (b): kautukamaṅgalapratisaṃyuktāni. PrP (a) and PrP (b) omit °vāda°. Śāli (Vai) and NS14 have 'kautukamaṅgalavādapratisaṃyuktāni'. PrP (Tib) has "dge mtshan dang bkra shis su smra ba dang ldan pa dag".

³⁸ PrP (a) and PrP (b) omit "unmiñjitāni nimiñjitāni ca".

³⁹ PrP (Tib) D 198a4; P 223b2: 'jig rten na dge sbyong dang bram ze dag gi lta bar song ba gang dag yod pa 'di lta ste / bdag tu smra ba dang ldan pa'am / sems can du smra ba dang ldan pa'am / srog tu smra ba dang ldan pa'am / gang zag tu smra ba dang ldan pa'am / dge mtshan dang bkra shis su smra ba dang ldan pa dag kyang rung ste / lhag par g-yo ba dang bral bar g-yo ba de dag / de'i tshes na des spang bar 'gyur te / yongs su shes nas / rtsa ba nas bcad de ta la'i mgo bzhin mi snang ba'i rang bzhin du / physis mi skye mi 'gag pa'i chos can du 'gyur ro //.

⁴⁰ 「有情論と結びついているもの」と訳した 'sattvavādapratisaṃyuktāni' について、PrP (a)もPrP (b)もこの語を欠くが、PrP (Tib) "sems can du smra ba dang ldan pa", NS14 及び Śāli (Vai)よりこの語を補う。

⁴¹ 「ブドガラ論と結びついているもの」と訳した 'pudgalavādapratisaṃyuktāni' について、PrP (a), PrP (b) 及びNS14に欠くが、PrP (Tib) "gang zag tu smra ba dang ldan pa" 及びŚāli (Vai)よりこの語を補う。

⁴² 「開かれたものと閉じられたもの」と訳した "unmiñjitāni nimiñjitāni ca" は PrP (a), PrP (b) 及び NS14 に欠くが、Śāli (Vai) 及び PrP (Tib) (lhag par g-yo ba dang bral bar g-yo ba) より補う。

⁴³ '無生無滅法' と訳した 'anupādānirodhadharmāni' に対応する語がNS14では 'anupādadharmāni' (無生法) となっている。

⁴⁴ 「吉兆 (*kautuka) と吉祥 (*maṅgala) [論 (*vāda)] と結びついている (*pratisaṃyukta)」と訳した "dge mtshan dang bkra shis su ldan pa" については、Śāli の引用であるが、これはNS14に類似しているはずであ

るから、NS14 の “kautukamaṅgalavādapratisamyuktāni” という語を参照して、このように訳した。

⁴⁵ ŚSMT D 51b4; P 64a3: dge mtshan dang bkra shis su ldan pa zhes bya ba la / dge mtshan ni 'jig rten na bzo'i gnas dang / rig pa'i gnas rnam pa sna tshogs gang dag yin pa dga' ston dang / bag ma gtong ba dang / bag ma len pa dang / 'thab mo dang / g-yul dang / skyed mos tshal dang / chu klung dang / rgya mtsho dang / ri dang / tshal dang / 'phags pa'i gzhan de dang de dag tu 'gro ba dang / lta ba dang / 'pho ba dang / 'jug pa dang / gnas pa'i rjes su dga' ba rtse ba'i bde ba myong ba'i gar dang / glu dang / tshig tu smra ba dang / rgyug pa dang / mchong ba dang / tshar dang / skyes pa dang / bud med dang / khye'u dang / bu mor 'gyed pa'i gdam dang / rtsod pa dang / lde'u brjod pa dang / glang po che dang / rta la sogs pa 'thab pa dang / rtsva dūr ba dang / zho dang / gi'u wang dang / zhing gshol dang / tho ba dang / me tog dang / 'bras bu dang / bum pa dang / dung dang / nya la sogs pa dang / bram ze dang / khyu mchog dang / zla ba dang / nyi ma dang / gza' dang / skar ma [D 52a] dang / rgyu skar dang // yud tsaṃ dang / sbyor ba dang / byed pa la sogs pa ste ltaṣ mkhan la sogs pa bdag nyid dang dag pa tshol ba dang / phyin ci log rnam pa du [P 64b] ma'i 'phyang thag la 'ju zhing lam ma yin pa la lam du 'du shes pa dang / ma dag pa la dag par 'du shes pa dang / ma grol ba la grol bar 'du shes pas 'gro ba drug gi 'khor lor zhugs pa'i blo gros can 'gro ba dang 'gro bar gyur pa rnam ni 'khor ba kho na'i rjes su 'brang gi / mya ngan las 'das pa yi ni ma yin no zhes de ltaṣ yang dag pa'i shes rab kyis mthong ba na phyin ci log rnam pa bzhi dang bral ba'i phyir rtsa ba nas bcad de / de mi snang bar gyur cing spangs pa yin pas yongs su shes nas rtsa ba nas bcad de / shing ta la'i mgo bzhi mi snang ba'i rang bzhi du phyis mi skye mi 'gag pa'i chos su 'gyur ro zhes bya'o //

⁴⁶ 梵語 'kautūhala' に対応するパーリ語は 'kotūhala' であるが、この語は、村上・及川 [2009] によれば、「大さわぎ、興奮、祭典」を意味する。また、*Dīgha-nikāya* I p. 179, ll. 31-32 には 'kutūhalasālā' (=kotūhalasālā) という語が見られるが、これについて、片山一良氏は「対論堂」と訳し、脚注で次のように説明する。片山 [2003: 221] : Kotūhala-sālā. 〈これは単独の会堂ではない。しかし、種々の異教者、沙門・バラモンたちが種々の話をするところである。それは、多くの者にとって、「かれは何を語るのだろうか」と、興奮 (kotūhala) が生じる場所であるから、対論堂と言われる〉。つまり、片山氏によれば、'kotūhala' とは「興奮」と関わるものと考えうる。

⁴⁷ 「根 (*mūla)」と訳した 'rtsa ba' について、これは 'rtsa ba nas bcad de' (= *samucchinamūlāni 根こそぎにされ) の「根」に対応するものと考えられる。

⁴⁸ ŚST D 163a3; P 195b6: dge mtshan dang ldan pa zhes bya ba ni de lta bu dang / gdam rgyud dang / sngon byung ba dang / glu bro la sogs pas bdag dga' bar 'gyur bar grag ces mngon par zhen pa'i phyir ro // bkra shis su smra ba dang ldan pa ni rtsva dūr ba dang / gi wang la sogs pa bsten pa dang / zho dang / me tog dang / bum pa gang ba dang / nya dang bram ze dang / khyu mchog la sogs pa mthong ba dang / skar ma dang / yud tsaṃ dang / tshes grangs dang / [P 196a] sbyor ba pa'i bye brag gis bdag rnam par dag par 'gyur ro zhes nga rgyal byed pa ste / de dag lam ma yin pa la lam du mngon par zhen pa'i phyir / tshul khrims dang brtul zhugs mchog tu 'dzin pa'i lta ba ste / bdag tu 'dzin pa ni rtsa ba'o //

⁴⁹ ŚST D 163a7; P 196a3: yongs su shes nas zhes bya ba ni bdag la sogs par nor ba'i yul bden pa ma yin par shes pa'o // rtsa ba nas bcad de zhes bya ba ni 'phags pa'i shes rab kyis bag chags de gtan nas bsal ba'i phyir ro // 「遍知さ

れ(*parijñātāni)」という [Śāli] は、アートマン等に対して、真実でない迷妄した対象と知ることである。「根こそぎにされ (*samucchinnamūlāni)」という [Śāli] は、聖なる慧によって、かの習気があらゆる仕方では排除されるためである。

⁵⁰ 'kautukamaṅgala' と「正見」との関わりについて、Dbh で言及されるとき「正見」は十善業道の説明で用いられ、Śāli で言及されるとき「遍知されること」は縁起の説明で用いられているから、両者の解釈は微妙に違っていると言うべきかもしれない。

⁵¹ 「吉兆 (kautuka) と吉祥 (maṅgala) と祈祷 (svastyayana) をした」と訳した 'kṛtakautukamaṅgalasvastyayana' について、蔵訳は 'dge mtshan dang / bkra shis dang / bde legs su 'gyur ba dag byas nas' と訳し、'kautuka' ・ 'maṅgala' ・ 'svastyayana' の三者を並列複合語で訳しているの、蔵訳にしたがってこのように解した。なお、平岡 [2007: 5] は「厳肅な儀式によって厄除けを済ませると」と訳す。

⁵² Divy p 4, l. 24-p. 5, l. 7: athāpareṇa samayena śronaḥ koṭīkaṇaḥ kṛtakautukamaṅgalasvastyayano mātuḥ sakāśam upasaṃkramya pādāyora nipatyā kathayati / amba gacchāmi avalokitā bhava mahāsamudram avatārāmi / sā ruditum ārabdhā / sa kathayati / amba kasmād rodasi / mātā sāśrudurdinavadanā kathayati / putra kadācid ahaṃ putrakam punar apī jīvantam drakṣyāmīti / sa saṃlakṣayati / ahaṃ maṅgalaiḥ saṃprasthitāḥ / iyam īdṛśam amaṅgalam abhidhatte / sa ruṣitaḥ kathayati / amba ahaṃ kṛtakautūhalamaṅgalasvastyayano mahāsamudram saṃprasthitāḥ / tvam cedṛśāny amaṅgalāni karoṣi / apāyān kiṃ na paśyasīti / sā kathayati / putra kharam te vākkarma niścāritam atyayam atyayato deśaya / apy evaitat karma tanutvam pariṣkayam paryādānam gaccheta / sā tenātyayam atyayato kṣamāpitā /. なお、Divy については平岡 [2007] の全訳があるので参照されたい。

⁵³ Divy p 24, l. 4. 翻訳については平岡 [2007: 30] 参照。

⁵⁴ VVṬ D 295b1; P 339a5: dge mtshan zhes bya ba ni srung ba'i phyir gi wang dang / tshon sna lnga'i skud pa dang / yungs kar la sogs pa lag pa la sogs pa la 'dogs pa'o // bkra shis zhes bya ba ni me tog dkar po dang / zho dang / ba lang dang / snod gzar pa dang / sha rlon pa la sogs pa mthong ngo // bde legs su 'gyur ba zhes bya ba ni mer sbyin sreg byed pa dang / bram ze klog tu 'jug pa la sogs pas zhi bar 'gyur ba'o //

⁵⁵ VVP D 30a2; P 36a2: dge mtshan zhes bya ba ni gi'u wang dang tshon sna lnga pa dang yungs kar dkar po gsang sngags kyis btob pa la sogs pa bkra shis kyi rtags so // bkra shis kyi zhes bya ba ni sha rlon pa dang me tog dkar po dang / ba bzhon dang rdza mng'a'i sgra dang / glang po che'i skad la sogs phyi rol gyi'o // bde legs su gyur pa zhes bya ba ni me'i sbyin sreg dang bram ze'i 'don pa la sogs pa srin po 'joms pa'o // yang na dge mtshan zhes bya ba ni yid du 'ong ba'i rgyu'o // bkra shis zhes bya ba ni yid du mi 'ong ba bzlog pa'o // bde legs su gyur pa zhes bya ba ni bgegs bsrung ba'o //

⁵⁶ AgVy D 96b3; P 111a4: dge mtshan zhes bya ba ni bdag po dang bu dang ming po phog pa la sogs pa la dge bar phyir 'ong ba la sogs pa'i don du bud med rnam kyis srung ba'i skud pa la sogs pa btags pa dang / lus kyi phyogs gcig la gi wang la sogs pas skud pa'o // bkra shis pa zhes bya ba ni shes par byed pa'i zho'i bum pa la sogs pa'o // dge legs su 'gyur ba ni bram ze dag zhi bar byed pa'o //

(くすもと のぶみち：筑紫女学園大学 非常勤講師)

